

M-1 グランプリから見る競技漫才の特性とお笑いの変化

マスコミュニケーションゼミナール 1316024 佐伯岳斗

1. 研究動機・研究目的

「お笑い」というのは我々の日々の暮らしの中に存在している。自分が所属するコミュニティやグループの中で各々の「お笑い」が存在し、様々な笑いを引き起こしている。偶然生まれる笑い、面白いことを言って生まれる笑い、おなら一つで生まれる笑い、おそらく様々な形式な笑いを我々は経験してきている。そんなお笑いの中に普段の我々の会話の延長線上として笑いを生むものに漫才というものがある。そのお笑い、漫才を競技としてとらえ競う大会が複数存在し、優勝賞金一千万円、民放キー局による生放送ということもあって事実上日本で最も大きな大会となっているのが、「M-1 グランプリ」という大会である。漫才の日本一を決める大会ということだけあって、注目度は非常に高く、年々その大会の価値というものが増している傾向にある。そんな M-1 グランプリに対して数々のお笑い芸人がこのように述べている。元お笑いタレント島田紳助は

「M-1 グランプリの戦い方は普通の舞台の漫才とは違う、テレビ芸や劇場で行うものとは全く違う」(DVD:紳助の研究)とコメントし、おぎやはぎは

「M-1 グランプリは競技漫才のようになってきていて、M-1 という新しいスポーツになってきている、和牛の漫才はとても落ち着いていて、構成もしっかりしているけど、スポーツではなかった」(2018年12月7日 TBS ラジオ「おぎやはぎのメガネびいき」)とコメントしている。

以上のように M-1 グランプリにおける漫才は劇場や寄席のものとは全く異なる闘い方をする必要があるとされている。このコメントを聞いた際に、普段テレビや劇場で見る漫才と競技としての漫才にどのような違いがあるかに興味を抱き、M-1 グランプリいわゆる競技漫才とはどのような特性があるのかを数値的に示してみたいという思いにより、本研究をするに至った。

また M-1 グランプリの特性から、これからのお笑いがどのように変化していくかを考え、普段あまり数値化されないお笑いを新しい視点から捉え、進路先であるテレビ業界でお笑いのプロデュースへと繋げていこうと思ったのが本研究の動機である。

2. 研究方法

2001～2010年、2015～2018年の計14大会を対象に、漫才における構成部分に着目し、以下の8項目の要因と順位の関係性について分析する。

①ネタ時間 ②ツカミの有無 ③最初の笑いが起きるまでの秒数 ④ボケ・ツッコミの回数 ⑤間の秒数 ⑥出番順 ⑦ボケ・ツッコミグラフ(パターン別) ⑧漫才の種類
尚、実際の大会は決勝進出者9～10組の中から順位の高い3組(2001年のみ2組)が決勝ラウンドとしてもう一度ネタを披露し、審査員が面白いと思った組に票を入れて優勝を決める形式であるが、本研究の対象は1度目のネタだけであり、最終的な順位とは差異がうまれる場合がある。

資料：Amazon プライムビデオ

※注意

- ・2001年、2017年、2018年は10組となるため10位は排除した。
- ・2003年のスピードワゴン、2010年のカナリアのネタは権利の都合上、Amazon プライ

ムビデオでは視聴できなかったことから、測定不可であった。

・2016年の銀シャリのネタは上に同じく視聴できなかったため、資料をYouTubeに変更した。

3. 主な結果と考察

主な結果として8項目の要因の中で、大きく順位へと関係性が見られた項目は「④ボケ・ツッコミの回数」である。7位から9位になったコンビの平均的なボケの回数は22.7回であるのに対し、4位から6位は24.2回、1位から3位は27.9回とボケの回数が増えるごとに高順位になりやすいことが分かった。

またくじびきではあるが「⑥出番順」においても大きな関係性が見られた。1番から3番手の出番順のコンビは56.8%と半数以上が7位から9位という結果に対し、4番以降の出番順のコンビは20%前後で7位から9位となり、3番手と4番手の間で約30%の差が生まれる結果となり1番から3番手のコンビは不利であるということが分かった。

全体的なM-1グランプリの考察としては、2010年以前と2015年以降では出場資格の芸歴が5年延長されたことで大会としてレベルが大きく上がっていることが考えられる。それによってボケだけで笑いをとる従来のスタイルからツッコミでも笑いをとれる近代漫才が増え、また会話の内容だけでなく和牛やジャルジャルといった設定の面白さで笑いをとる漫才風のコントが増加している傾向にあり、漫才の形式にも変化が見られた。

4. 結論

M-1グランプリで上位をとる確率が高くなるのは、ネタ分数が5分以内、最初の笑いが起きるまでの秒数が50秒以内であり、ボケ・ツッコミの回数(合計)が50回以上、間の秒数が3~4秒、出番順が4番以降、ボケ・ツッコミグラフがパターン1(右肩上がり)ということになる。

またM-1グランプリは2010年以前から2015年以降へレベルが大幅にあがり、それに伴って漫才コントの増加など漫才の形式にも変化が生まれている。

5. 卒業論文の執筆を終えて

まずは論文の書き方や表のまとめ方など細部にわたりご指導いただいた神原先生には心より感謝申し上げます。学科の講義、ゼミナール活動中にスポーツのマネジメント理論から日本の財政、政治にいたるまで幅広く話をさせていただくなかで、多くのことを学びました。ここで得た学びを忘れず、社会に貢献できる人になっていきたいと思いをします。

本研究を執筆するにあたり、テーマ選びには非常に苦労しましたが、素直に自分が知りたいと思うこと、探求心を持ち続けられるもの、わくわくしながら進められるものそう考えた結果、お笑いが好きだった私にとっては非常に楽しく携われることができる内容でした。根本を言えば私が知りたい、深く探ってみたいというエゴによるものですが、結果的にそれが誰かのためになる時があれば、非常に嬉しく思います。この研究が誰かの何かの役に立つことを願いながらマネ科のこころとさせていただきます。